

瓜生堂遺跡 99

発掘現場公開資料－2

2000.12.16

(財)大阪府文化財調査研究センター

調査箇所：東大阪市岩田町1・2丁目

調査面積：約1587㎡(99-1～10区)

調査期間：2000.2.9～2001.7.31(予定)



99-10区調査風景(東から) 近鉄奈良線の上を近畿自動車道が横切るように交差しています。電車の走行を絶対にさまたげないように、細心の注意を払いながら、高所作業車による写真撮影を行っているところです。

■はじめに

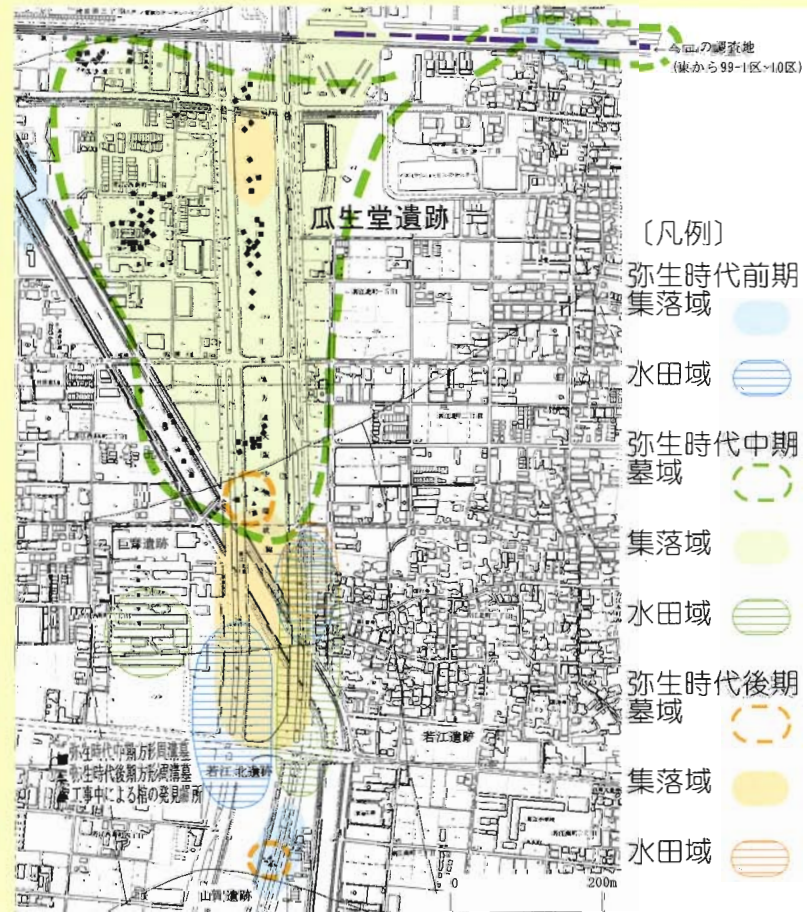
瓜生堂遺跡は東大阪市のやや西側に位置し、近鉄奈良線と近畿自動車道(中央環状線)、第二寝屋川にかこまれた地域を中心とする広範囲な遺跡です。現在、近鉄奈良線の立体交差工事にともない高架予定線路部の発掘調査を続けています。まだ調査の途中ですが、これまでの成果として、いろいろな時代の様子が明らかになるとともに、遺跡の範囲がさらに北東側へ広がることなどが明らかとなりました。

■瓜生堂遺跡とは

瓜生堂遺跡は、主として弥生時代中期中ごろの時期の、弥生人たちのムラの跡として、また数多くのお墓(方形周溝墓)が見つかることで全国的にも有名な遺跡です。この遺跡の発見は、1964年の中央環状線建設に先だって行われた下水道工事で、多数の土器が見つかったのがきっかけでした。その後、近畿自動車道建設のさい、大規模な発掘調査が行われています。周辺にはこのほか、巨摩遺跡や若江北遺跡といった、この遺跡と深い関わりをもつ弥生時代の遺跡が存在します。これらもあわせると、弥生時代中期中ごろのムラやお墓の範囲は南北に大きく広がっていたことが分かります。以下では、今回の調査成果を古い時代からご紹介します。

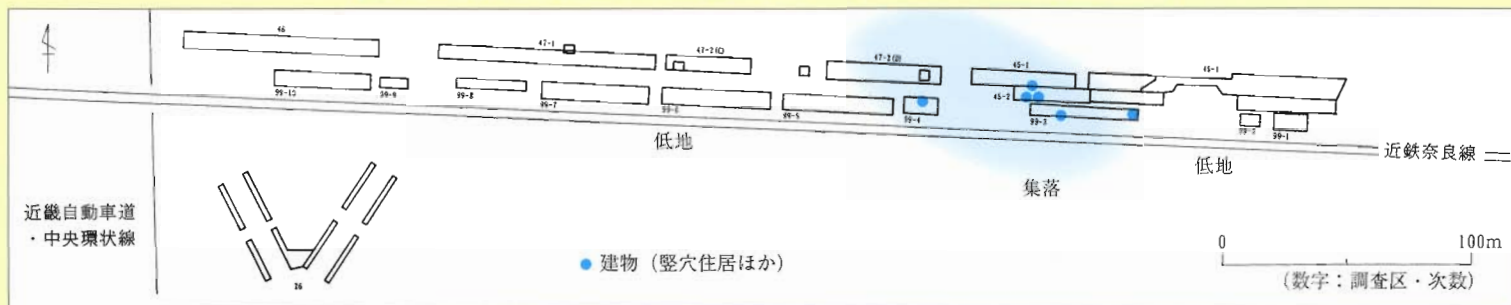


瓜生堂遺跡の位置



瓜生堂遺跡の遺跡分布範囲

弥生時代前期（およそ 2250 ～ 2200 年前）



99-3区集落跡（西から） この遺跡で最初にムラを営んだ人びとの生活の証は、現在の近鉄奈良線の地下5mもの深い地層に眠っていました。

調査区のほぼ中央部の一帯（99-3区～5区付近）は、当時の地面が周辺よりやや高い場所にあたり、そこで人びとが生活していたムラの跡を発見できました。99-3区のすぐ北側の45-2次調査でも、2年前に建物跡（竪穴住居ほか）が3棟見つかりましたが、今回もあらたに3棟が確認できました。これら以外には、たくさんの掘り込み穴、排水用の溝、10cmほどの石を集めた場所などの遺構を調査できました。さらに、ムラのほぼ東端で低地部との境には、南北方向のやや大きな溝が掘られており、それより東側では遺構や土器などはほとんど発見されていません。ムラで使われた道具として、壺や甕などの土器、石斧や砥石などの石器、魚取り用網の錘や糸をつむぐための紡錘車などの土製品、農具のクワなどの木製品が出土しています。



99-4区建物跡（西から） 当時の住居（家）の跡。白線で示したカーブする溝は建物の輪郭、その内側の丸い穴は柱穴や炉の跡を示しています。



99-4区建物・溝跡（南から） ムラのまわりは低い土地であったようで、住みやすくするために、住居やその周辺に溝を掘り排水を行っています。

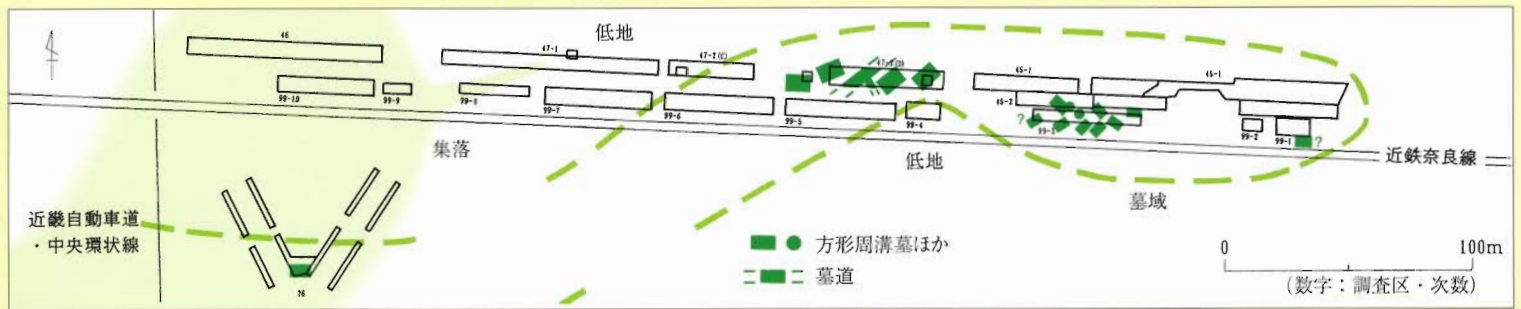


出土遺物（99-3・4区） ムラを拓いた人びとが使っていた、文様で飾られた土器（左）、土製の錘、紡錘車（右上）、石製の斧、砥石、円板（右下）。



出土遺物（99-3・4区） 木製のクワと柄。左例の側縁上部にはギザギザの加工がみられます。右例は、建物柱の礎板として再利用されていました。

弥生時代中期（およそ 2100 ～ 2050 年前）



調査区の東側（99-3区）では、方形や円形にめぐる溝が多く見つかり、その内側にはマウンド状の盛り土が確認されました。溝からは、後から孔のあけられた壺や甕、水差しといった土器が出土したことから、おそなえの土器（供献土器）をもつお墓（方形周溝墓ほか）であることが分かりました。また調査区の東端（99-1区）でも、同じような土器が確認できたので、この付近にもお墓が存在したことや、遺跡の範囲がさらに北東へ広がることなどが考えられます。

一方、調査区の西側（99-10区）では、おびただしい数の柱穴や火を燃やした跡（炉）などが見つかりました。少し高くなったところで人びとが生活していたようで、くぼ地には使えなくなった土器や石器などが捨てられていました。お墓をつくった人びとが住んでいたムラの跡かもしれません。



99-3区方形周溝墓群（西から） 弥生時代中期後半ごろのお墓。人為的にあつゐ盛り土がなされており、溝からは供献土器が出土しました。



99-10区集落跡（東から） 弥生時代中期後半のムラの跡。高まり部分で柱穴、炉跡などが見つかり、落ち込み部からはたくさんの土器が出土しました。



99-1区溝状くぼみ（西から） 溝状になったくぼ地からは供献土器と思われる土器が見つかったので、周辺にお墓があった可能性が考えられます。

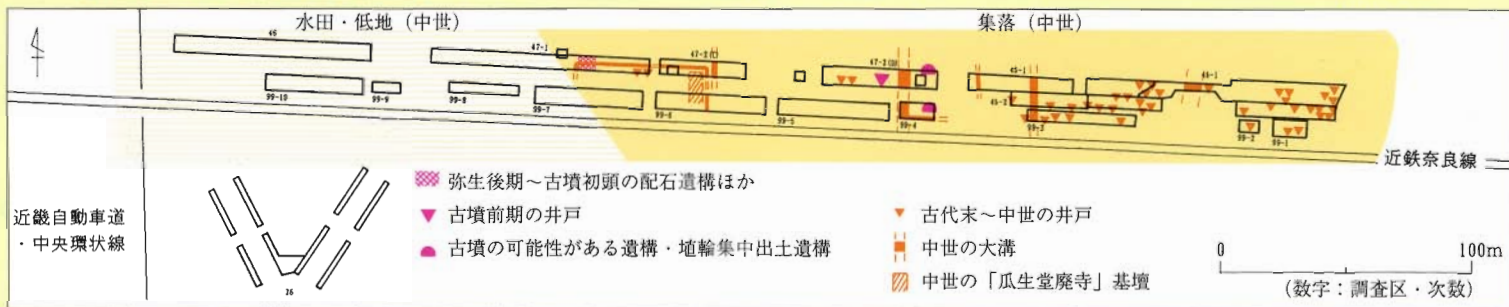


出土遺物（99-10区） 当時のムラの跡から出土した土器（右）と石器（左）。茶色の土器は生駒山の西麓部付近で作られたものといわれています。



出土遺物（99-1・3区） お墓の供献土器。壺、甕、高杯、無頸壺、台付鉢など。持っているのは水差し。土器を焼きあげた後に孔があけられています。

古墳時代（およそ 1700 ～ 1500 年前）と中世（およそ 800 ～ 500 年前）



99-3区中世集落跡（西北西から） 建物の柱穴や井戸、溝などが数多く検出でき、長い期間にわたって村が続き、人びとが住んでいたと分かります。



99-4区埴輪検出状況（南西から） 溝状にくぼんでいる部分から、円筒埴輪や鶏形埴輪、須恵器などが割れた状態で出土しています。



出土遺物（99-4区） 上の写真の遺構から発見された円筒埴輪と鶏形埴輪。鶏は首から上だけですが、くちはしや目が忠実に表現されています。

弥生時代後期～古墳時代初頭は、沼地や川が存在した場所であったので集落跡は発見できませんが、47-1次調査では弥生時代末前後の配石遺構などが確認されています。その後の時期においては、古墳時代前期～中世（ほぼ鎌倉・室町時代）の遺構が同一面で検出されています。古墳時代では、埴輪が多く発見できるので、古墳が近くにあったことを示しています。平安時代末～室町時代では、村が継続して広い範囲に営まれていたようです。曲物や土釜を井戸枠に用いた井戸や、底に石を敷いた柱穴も見られました。99-4区で確認した南北溝は大規模で、その西側に豪族の屋敷や寺院などがあったと考えられます。瓦がやや多く出土することから、寺院であった可能性が高いといわれています（仮称：瓜生堂廃寺）。調査区西側の低地部では、水田跡も見つかりました。



99-4区大溝検出状況（南東から） 幅5m以上、深さ1.5mにもおよぶ中世の堀状の大溝です。「瓜生堂廃寺」の東端を区画する可能性があります。



出土遺物（99-1～4区） 中世の瓦（左）と茶臼（右）。瓦は軒丸・軒平瓦、鬼瓦などさまざまで、茶臼も一般の集落跡では出土しないものです。